

芸術工学部・芸術工学研究院

I	研究の水準	研究 10-2
II	質の向上度	研究 10-4

I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）における原著論文発表件数は、全体で合計1,218件、教員一人当たり合計2.2件となっており、そのうち90%は査読付きとなっている。また、原著論文のうち665件は外国語で執筆し、613件は国際誌に発表している。
- 第2期中期目標期間における著書の発表件数は、合計165件となっており、そのうち単著は28件、外国語による著作は18件となっている。
- 第2期中期目標期間における作品発表件数は、合計349件となっており、「JR博多口駅前広場のデザイン」で平成23年度グッドデザイン賞を受賞するなど国内外で様々な賞を受賞している。
- 第2期中期目標期間における調査報告書等の発表件数は、合計421件となっているほか、政策形成や学術振興に関わる審議会委員等は年度平均90.7件、公開講座や講演会等は年度平均136.5件行っている。
- 科学研究費助成事業の採択額は、平成22年度の約1億2,700万円から平成27年度の約2億2,600万円へ増加している。

以上の状況等及び芸術工学部・芸術工学研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、平成25年度に応用知覚科学研究センター、平成26年度に応用生理人類学研究センター、平成27年度にソーシャルアートラボを設置し、人間の基礎的研究からデザイン実践まで有機的な連携を組織的に進めており、特に応用人類学において卓越した研究成果がある。

- 卓越した研究業績として、応用人類学の「現代日本人の生理的多型を構成する遺伝要因の検証」、「光の非視覚的な生理反応に及ぼす影響の解明」及び「地球温暖化と人工環境普及に伴う人類の暑熱適応能の変化に関する研究」がある。「現代日本人の生理的多型を構成する遺伝要因の検証」は、ヒトの生理的多型は遺伝要因によって影響を受けることを示しており、平成 25 年度日本生理人類学会論文奨励賞の受賞や国際会議での招待講演を行っている。
- 社会、経済、文化面では、自治体、企業によるまちづくりや道路、景観等の整備プロジェクトのデザイン、設計、監修等を行い、デザイン実践を通して研究成果を社会に還元しており、特にデザイン学、哲学・倫理学、実験心理学において特徴的な研究成果がある。また、平成 23 年度グッドデザイン賞等を受賞している。
- 特徴的な研究業績として、デザイン学の「JR 博多口駅前広場のデザイン」、哲学・倫理学の「理性の暴力に関する研究」、実験心理学の「聴覚の文法」がある。

以上の状況等及び芸術工学部・芸術工学研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、芸術工学部・芸術工学研究院の専任教員数は 88 名、提出された研究業績数は 26 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 24 件（延べ 48 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 5 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 18 件（延べ 36 件）について判定した結果、「SS」は 2 割、「S」は 7 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

II 質の向上度

1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 科学研究費助成事業の採択額は、平成 22 年度の約 1 億 2,700 万円から平成 27 年度の約 2 億 2,600 万円へ増加している。また、科学研究費助成事業データベースによると、科学研究費助成事業のデザイン学の細目において、平成 23 年度から平成 27 年度における通算採択総数は、39 件で全国 1 位となっている。
- 教員一人当たりの査読付き原著論文の件数は、第 1 期中期目標期間の年度平均 1.6 件から第 2 期中期目標期間の年度平均 2.0 件に増加している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 平成 25 年度に応用知覚科学研究センター、平成 26 年度に応用生理人類学研究センター、平成 27 年度にソーシャルアートラボを設置し、人間の基礎的研究からデザイン実践まで有機的な連携を組織的に進めている。これにより、デザイン学の「JR 博多口駅前広場のデザイン」等の研究成果があり、平成 23 年度グッドデザイン賞等、第 2 期中期目標期間における教員の受賞件数は、合計 89 件となっている。

これらに加え、第 1 期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

2. 注目すべき質の向上

- 平成 25 年度に応用知覚科学研究センター、平成 26 年度に応用生理人類学研究センター、平成 27 年度にソーシャルアートラボを設置し、人間の基礎的研究からデザイン実践まで有機的な連携を組織的に進めている。これにより、デザイン学の「JR 博多口駅前広場のデザイン」等の研究成果があり、平成 23 年度グッドデザイン賞等、第 2 期中期目標期間における教員の受賞件数は、合計 89 件となっている。
- 科学研究費助成事業の採択額は、平成 22 年度の約 1 億 2,700 万円から平成 27 年度の約 2 億 2,600 万円へ増加している。